震災がつなぐ全国ネットワーク 2017 年度緊急救援活動報告書

文責：松山文紀（震つな事務局）

2017 年度は以下の災害に対して、事務局および会員団体等が被災地域において支援活動を行った。

１．九州北部豪雨災害への対応（7/5 発災）＠大分県日田市福岡県朝倉市、東峰村、添田町

２．台風 3 号による秋田豪雨災害への対応（7/22 発災）＠秋田県大仙市

３．台風１８号災害への対応（9/17 発災）＠大分県佐伯市、津久見市、臼杵市

４．台風２１号災害への対応（10/21 発災）＠三重県伊勢市、玉城町

以下、活動内容等詳細を記す。

１．九州北部豪雨災害

発災日：7 月 5 日

活動期間：2017 年 7 月～12 月（事務局および会員）

活動場所：大分県日田市
福岡県朝倉市、東峰村、添田町

活動内容：(1)被害状況の把握
(2)支援者の活動内容と活動地域の情報収集と発信
(3)会員団体の現地活動拠点の運営
(4)現地組織の運営サポート
(5)水害にあったときに　冊子･チラシ配布

7 月 5 日に発生した大規模土砂災害に対し、会員団体や関係する組織の動きについて情報収集を行い、適宜 SNS やブログ、メーリングリスト等を活用し、情報発信を行った。朝倉市の被害が大きかったため、報道も支援も同市に集中していたことから、手薄となるであろう大分県日田市の支援を行うことを決めた。

朝倉市には、全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（通称：JVOAD）が情報共有の仕組みをつくるために常駐スタッフを置いたが、地理的な影響もあり、大分県側への働きかけが十分にできない状況にあったことも踏まえて、当ネットワークとして日田市での支援活動を活動地域として選定し、支援活動を行った。

■震つな会員団体の動き＠日田市

・レスキューストックヤード（災害 VC 運営サポート）
・被災地 NGO 協働センター（災害 VC 運営サポート）
・愛･知･人（現場活動、イベント出店等）
・災害ボランティアコーディネーターなごや（足湯）
・静岡県ボランティア協会（足湯、喫茶活動）

このほか、会員団体とつながりのある団体等が日田市にて支援活動を行った。

■震つな事務局の動き

震つな事務局員 1 名が被災地域全般（朝倉市、添田町、東峰村、日田市）を回り、被害状況や程度を把握。近年にない大規模な土砂災害であると判断する一方、現地の災害ボランティアセンター（以下、災害 VC）での活動や独自に現地入りして活動する NPO 等の活動内容を踏まえて、日田市内において宿泊拠点を設け、会員団体を含む関係団体の支援活動をサポートするため、拠点運営を行った。加えて、拠点活用を促すため、現地の活動情報および拠点活用のための広報を行った。

■現地災害ボランティアセンターの運営サポート

日田市社会福祉協議会が運営を担う災害ボランティアセンターが 8 月末をもって閉所することになり、その後を引き継ぐ形で「ひちくボランティアセンター（以下、ひちく VC）」が設立されたことから、災害 VC 閉所後も支援活動を継続。12 月中まで度々滞在し、拠点運営の他、ひちく VC 運営の支援を行った。

■活動･宿泊拠点の運営

日田市駅前に 4DK の物件を借り、最大 15 人程度が宿泊できる環境を整え、8 月～12 月の間、運営を行った。会員団体を中心に、期間内に延べ 200 人以上が宿泊利用をした。これにより、通常経費として発生する宿泊費を抑えることができた上に、活動状況の情報共有が進むような拠点運営ができた。

主な利用団体

・レスキューストックヤード
・被災地 NGO 協働センター
・静岡県ボランティア協会
・災害ボランティアコーディネーターなごや
・その他、個人会員　など

２．台風 3 号による秋田豪雨災害

発災日：7 月 22 日

活動期間：7 月 31 日～8 月 4 日（事務局）

7 月 27 日～8 月 9 日（会員団体）
活動場所：秋田県大仙市
活動内容：支援者の動向把握
水害にあったときに　冊子･チラシ配布

水害発生の情報を受け、事務局員 1 名を秋田県に派遣。複数の市町村での被害報告があったことと、九州北部豪雨の影響により、NPO などの支援団体の現地入りが少ないことから、事務局では被害の一番大きかった大仙市での支援者の動向把握を行うこととした。

被災家屋の床下部への対応（乾燥の勧めや解説）が不十分なため、床下乾燥の必要性が説明でき、かつ床下の活動ができる者の派遣が有効との現地情報を受け、会員団体に呼びかけをし、2 団体（風組関東、レスキューアシスト）が現地にて活動を行った。

３．台風１８号災害

発災日：9 月 17 日
活動期間：9 月 18 日～19 日、10 月 7 日（事務局）
9 月 28 日～11 月 24 日（会員団体）
活動場所：大分県佐伯市、津久見市、臼杵市
活動内容：資器材の貸与・搬送
被害状況と支援活動状況の把握
現地にて活動する団体会員の支援
水害にあったときに　冊子･チラシ配布

■資器材貸与・搬送

同時期に九州北部豪雨により被災し、災害 VC にて活用していた資器材の一部を佐伯市災害 VC に搬送。津久見市には名古屋にて保管する資器材を搬送した。

臼杵市災害 VC からも資器材貸与の要請があったが、数量が少なかったことから日田市にあった資器材を搬送した。

佐伯市、臼杵市では被害軒数が多くなかったこともあり、災害 VC が早期に閉所することになった一方、津久見市では被害軒数が多く、災害 VC 運営も長引いていた。そのため、事務局スタッフ 1 名が支援の必要性を判断するため現地入りし、現地災害 VC 運営者と支援の可能性について検討するも、VC 運営の必要性は少ないとの判断から、VC 運営のサポートは行わなかった。

このほか、津久見市や地元自主防等の要望により、床下の対処や制度の申請などを理解するための勉強会（市主催）に講師として参加（会員および事務局）。

４．台風２１号災害

発災日：10 月 21 日
活動期間：10 月 26～27 日、11 月 2～5 日（事務局）
10 月 27 日～12 月 24 日（会員団体）
活動場所：三重県伊勢市、玉城町
活動内容：災害 VC 運営者への研修
床下清掃の告知と清掃
水害にあったときに　冊子･チラシ配布

■資器材貸与・搬送

台風 18 号の対応で佐伯市に貸し出していた資器材が津久見市にまとまっており、その中から必要と思われる物をまとめて伊勢市社協（災害 VC）に搬送した。伊勢市および玉城町での水害は泥や土砂がほぼないタイプの水害のため、搬送したスコップは活用する機会がなかった。（伊勢市社協よりヒアリング時に確認）

５．その他

2017 年度は水害被害の個所数が多かったことに加え、被災件数も多かったことから、2016 年度に作成した「水害にあったときに」チラシ版・冊子版ともに要望が多く、合計で 10,000 部以上を被災地域に送ることになった。

■主な送り先

(1)九州北部豪雨
・朝倉市災害 VC＝冊子 2,000
・朝倉市福祉課＝冊子 1,000、チラシ 1,000
・日田市災害 VC＝冊子 1,500、チラシ 2,000
・NPO＝冊子 2,500、チラシ 2,000
・その他＝冊子 150

(2)秋田豪雨
・秋田県社協＝冊子 1,200、チラシ 1,000

(3)台風 18 号
・大分県社協＝冊子 1, 000
・津久見市災害ＶＣ＝冊子 400

(4)台風 21 号
・伊勢市災害ＶＣ＝冊子 600、チラシ 1,600
※玉城町分も含む
・紀宝町社協＝冊子 50、チラシ 50
・河内長野市社協＝冊子 100、チラシ 100
・川越市社協＝冊子 200（団体会員が持参）

合計（概算）
冊子 10,700、チラシ 7,750　を被災地域にて配布

ひちくボランティアセンター　活動レポート

—2018 年 3 月分—

1.　災害ボランティアセンター事業

2017 年 9 月 1 日から、ボランティアセンターを開設して、居宅内外の泥出しや農地の泥出し等のニーズに対して、毎週金～日・祝日にボランティアの受け入れを行っています。

＜農地の泥出し風景＞

当月は、主に田畑や水路の泥出しのニーズに、述べ 250 名のボランティアに協力いただきました。ご協力いただいたボランティアの皆さま、ありがとうございました。約 25 件のニーズが残っていて、引き続きご協力をお願いします。

	当月	述べ数
活動日数	13 日	75 日
ボランティア数	250 名	2221 名
活動件数	40 件	308 件
完了件数	6 件	132 件

先日、大鶴の住民と一緒に線路沿いの側溝の土砂出しを行いました。発災当初から、ニーズ対応は市外のボランティアの皆さまにご協力いただいていましたが、徐々に地元住民と土砂出しをすることが多くなってきました。地元と一緒に復旧・復興に向けて活動を続けていきたいと思います。

2.　みなし仮設訪問事業

日田市では、建設型（プレハブ）の仮設住宅はなく、借上型仮設住宅（みなし仮設）に約 50 世帯が入居しています。ひちくボランティアセンターでは、地元の地域おこし協力隊やケアマネージャーのボランティアらと支援チームを作り、個別訪問を行っています。

当月訪問件数	6 件

当月もリフォーム等で再建が進んだみなし仮設入居者から 2 件の引っ越しがありました。みなし仮設入居者は大半が以前と異なる地域に移転しており、「住み慣れた地元に戻りたい」とリフォームをするなどして再建する方が増えてきました。引っ越し費用については、支援制度がないため多くは家族で行われますが、移転先はエレベーターがないアパートが多いため、チーム大分を始め、ボランティアでサポートを行なっています。

＜引っ越しボランティアの作業風景＞

住み慣れた地元に再建したはいいが、隣接した河川の復旧は進んでおらず今年の梅雨に再度被害が出るかもと不安の声もあります。再建＝支援終了ではなく、今後も見守っていく必要があると感じています。

＜再建者の自宅横の河川の様子＞

3. イベント・コーディネート事業

住民の憩いの場づくりや外部支援のコーディネートも行っています。

■ 3月17日ITロボットイベント@小野公民館

発災後から日田市災害ボランティアセンターを支援していた、富士ソフト株式会社と小野地区の子どもたち向けのロボットイベントを共催し、AIロボットとの触れ合いやロボット相撲など、約20名の子どもと保護者が参加しました。

＜ロボット相撲で遊ぶ子どもたち＞

■ 視察受け入れ

日田市の現状と支援団体の活動状況を学びたいと、大分市高田校区社協、日田市ボランティア連絡協議会、院内町ボランティアネットワークの視察受け入れを行いました。

＜高田校区社協＞

4. お知らせ

■ ボランティア保険について

新年度となりましたので、ひちくボランティアセンターで今年度始めてボランティアを行う場合、事前にお住まいの社会福祉協議会にてボランティア保険の加入をお願いいたします。

5. 募集

■ UVカット土嚢袋1万枚プロジェクト

今年の梅雨対策として耐久性の高いUVカット土嚢袋を大募集しています。ご支援いただける方は、以下の当団体へ送付いただければ幸いです。事前に枚数等をお知らせいただければ助かります。

これまで2110枚のUVカット土嚢袋があつまりました。ご協力ありがとうございます。

発行：ひちくボランティアセンター

＜団体連絡先＞
住　所：日田市大鶴本町８７０　大鶴公民館敷地内
電　話：090-5284-4733
メール：hichikuvc@gmail.com
H　P：https://hichikuvc.wixsite.com/hivolu
フェイスブック https://www.facebook.com/hivolu/

＜ひちくボランティアセンターとは＞

当団体はH29年九州北部豪雨水害をきっかけに立ち上がり、被災者支援活動を行っています。「ひちく」とは肥筑方言を由来とし、日田だけではなく、今回被災した市町村の復興を願い名付けました。

認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード

平成 29 年九州北部豪雨水害 被災者支援

活動報告書

2017 年 7 月～2017 年 12 月の報告

大分県日田市

日田市は福岡空港から車で 1 時間ほど南下した場所に位置し、人口は約 6 万 7 千人、高齢化率は 22%で、面積約 666km²、18 の小学校区から構成されています。周囲を山に囲まれた典型的な盆地で、多くの河川が流れ込み、水辺の美しい自然と景色に囲まれた「水郷（すいきょう）」の町として有名です。400 年も続く鵜飼も盛んで、夏から秋にかけては、鮎・鰻・ヤマメ漁で賑わいます。また、市街地は江戸の面影の残る町並みが広がり、ご当地グルメの「日田やきそば」も人気があります。

主な産業は農業と林業。毎年おいしい米や野菜・果物などが多く収穫される一方、盆地のため、夏は 35℃を超える猛暑日が多く、冬は積雪もみられます。。年間の降水量も多く、根が浅い杉や檜の栽培が土砂崩れ等の自然災害を発生させる原因にもなっています。そのため、平成 24 年 7 月九州北部豪雨の被害を受けています。

1 時間最大降雨量 87.5 mm、24 時間雨量 370 mm（観測史上最高）
死者 3 名、全壊 45 世帯、大規模半壊 31 世帯、半壊 325 世帯、
床上浸水 143 世帯、床下浸水 781 世帯の家屋被害
借上型仮設（みなし仮設*)には約 70 戸が入居

＊みなし仮設：民間住宅を国や自治体が借り上げて、仮設住宅の代わりとして被災者に提供したり、公営住宅や雇用促進住宅、被災者が自力で借りた賃貸住宅も仮設住宅とみなしたりした住宅を総称して「みなし仮設」とし、家賃などを国が負担している。

活動記録

2017 年

7/5　豪雨により九州にて土砂災害発生との情報を受け、緊急時体制に移行
7/6　RSY 松永が福岡経由で大分県日田市入り
7/7　日田市内で情報収集（被災状況の視察を含む）
日田市にボランティア活動資器材搬出（ボランティア 22 名参加）
7/8　日田市災害ボランティアセンター(VC)にて名古屋からの資器材受け入れ
街頭募金（22 名参加・85,786 円）
7/9～　日田市災害 VC（本所）運営支援
街頭募金（40 名参加・252,123 円）
7/12～16　RSY 浦野が朝倉入り（避難所環境改善のための支援）
7/14　朝倉市にボランティア活動資器材を搬出（ボランティア 12 名参加）
7/15　朝倉市災害ボランティアセンターにて名古屋からの資器材受け入れ
7/16～　日田市災害 VC 大鶴サテライト運営支援
7/24～29　RSY 浦野が朝倉入り（避難所環境改善のための支援）
7/29　第 1 回「日田市災害 VC 情報共有会議」に参加
8/4　大鶴地区「豪雨災害に関する自治会長懇談会」に参加
8/5　第 2 回「日田市災害 VC 情報共有会議」に参加
街頭募金（15 名参加・55,678 円）
8/6　街頭募金（19 名参加・72,142 円）
8/11　第 1 回「日田市豪雨被害復旧・生活支援のための NPO 情報共有集会」に参加
8/12　第 3 回「日田市社協情報共有会議」に参加
8/17　JVOAD「九州北部豪雨支援者情報共有会議」に参加
8/18　小野地区「豪雨災害に関する自治会長懇談会」に参加
8/26　子ども企画「川・山へ行こう！！」へ企画協力
8/27～28　大鶴地区にて、なごや防災ボラネットと共に足湯ボランティア・サロン開催
8/28　第 2 回「日田市豪雨被害復旧・生活支援のための NPO 情報共有集会」に参加
9/1～　「ひちくボランティアセンター」運営支援
9/1　日田市主催「被災者との意見交換会＠小野地区」に参加
9/4　RSY 九州北部豪雨水害支援活動報告会
9/4　日田市主催「被災者との意見交換会＠大鶴地区」に参加
9/6　日田市主催「被災者との意見交換会＠東有田地区」に参加
9/10　街頭募金（5 名参加・9,605 円）
9/18　街頭募金（6 名参加・27,143 円）
9/19　大分県佐伯市（台風 18 号の被害）へ日田市の資器材を輸送
10/5　「ひちくボランティアセンターネットワーク会議」に参加
10/28　「みんなで大鶴交流会」に参加

＜定例開催（9 月～）＞
・ひちくボランティアセンター事務局会議（毎週木曜日 18:00～）
・ひちくボランティアセンター世話人団体会議（毎週木曜日 19:00～）
・一般ボランティア活動の受け入れ（毎週金～日・祝 8:00～16:00）

※青字は名古屋にて行った活動

福岡県朝倉市支援

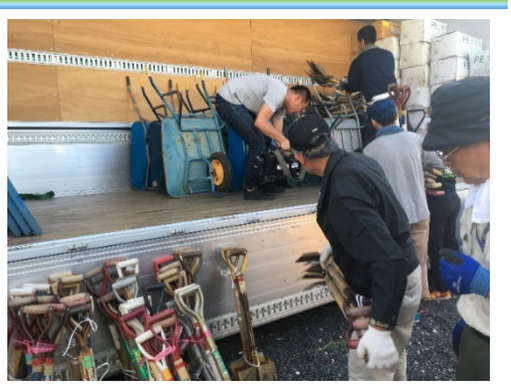
災害ボランティア活動支援プロジェクト会議(支援Ｐ)からの要請により、、名古屋から水害対応の資器材一式を７月 14 日に積み込み、朝倉市災害ボランティアセンターに向け搬送。積み込み時には 12 名のボランティアの方々にご協力いただきました。

また、朝倉市からの要請を受け、全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）と協働し、市内７箇所・約 600 名の避難所改善を行ないました。市や JVOAD の連携団体である 4NPO 団体らと、トイレ・寝床・衛生・福祉避難スペースの設置や改善、孤立や生活不活発病防止のための日中活動の取組みなどについて検討し、できるところから整備を行ないました。

また、７月 29 日には、地元のボランティア連絡協議会と外部支援者、市の担当課らと共に、「今後の支援を考えるワークショップ」を開催。地元ボランティアの強みを活かした長期的な支援活動を進めるためのきっかけづくりをサポートしました。

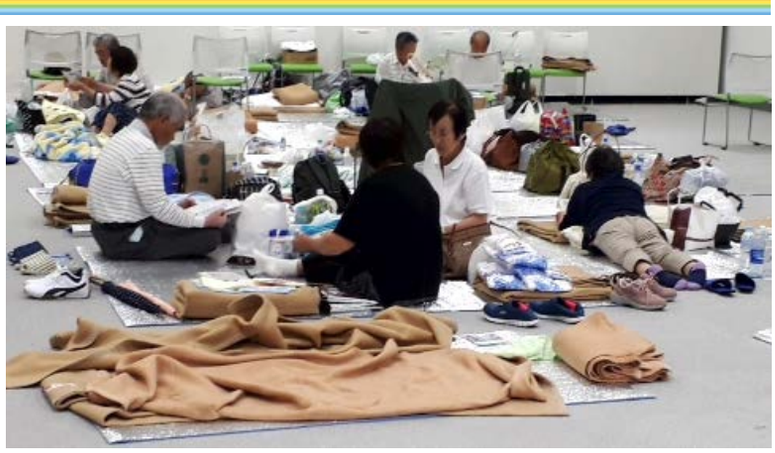
大分県日田市支援　ボランティア活動資材の貸与

大分県社協より、大分県日田市への資器材借用の要請があり、４トントラック１台分の資器材を搬出しました。搬出作業は、中部土木株式会社・防災ボラネット守山・名古屋みどり災害ボランティアネットワーク・名古屋きた災害ボランティアネットワーク・名古屋ひがし防災ボランティアネットワーク・災害ボランティアちくさネットワーク・ＲＳＹボランティアの方々、スタッフ合わせて 22 名で行いました。



避難所支援

７月９日時点で市内には 46 か所（内自主避難所９ヵ所）・373 名の避難所が開設されました。市内４カ所の避難所を訪問し、被災者の不安の声を聞き取ったところ､「復旧作業やこれからどうしたらいいか不安」という声に対し、震災がつなぐ全国ネットワーク（震つな）が発行した水害被災者向けのブックレット「水害にあったときに」(冊子版）を避難所に配布しました。



●日田市災害ボランティアセンター運営サポート

7 月 8 日、日田市社会福祉協議会からの要請を受け、日田市災害ボランティアセンター（VC）の運営支援として主にニーズ調査を担当しました。水害時の復旧作業は、畳を上げて床板を剥がし、泥出し～乾燥～消毒の手順が必要です。過去の災害では十分な処理をしないまま泥を放置し、数週間経った後にカビが発生したという事例もあります。そこで、被災していると思われる家屋を個別訪問し、丁寧なヒアリングと状況確認を重ねながらニーズ調査を行ないました。日田市社協や地域おこし協力隊、集落支援員にも同行してもらったことで、住民の方々が安心して困りごとが訴えられる環境づくりも整いました。7 月 16 日には、被害の大きかった大鶴地区に災害 VC のサテライト（支所）が設置され、RSY は他の NPO と共に運営をサポートしました。災害 VC での活動は家屋内の復旧を優先するため、事業所は支援の対象外となっていましたが、小野地区の小鹿田（おんた）焼の窯元や小規模事業所も町の産業復興を支える重要な地域資源と考え、NPO が対応できるよう柔軟な体制づくりにも努めました。

また、日田市災害 VC の今後について検討することを目的に、日田市社協・大分県社協・県内派遣社協・災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援 P）・被災地 NGO 協働センターが集まり、被災者ニーズの変化や災害 VC 閉所後の支援と連携について協議しました。

●集落支援

甚大な被害のあった大鶴地区と小野地区にて、市まちづくり推進課主催の自治会長との意見交換会が開催され、RSY をはじめ支援に携わる NPO も参加しました。この会は、地域の課題や自治会長が抱える悩みを聞き、情報共有を行うことを目的に開催され、大鶴地区では、地区が広いために集落毎に災害に対する温度差がある、台風等による二次災害の恐怖、次の災害を恐れて移転する住民が増えている等の課題があげられました。また、小野地区住民からは「ボランティアにお願いするのに遠慮がちな住民が多い」などの声もあり、住民の心的状況や生活実態に配慮した丁寧な関わりと信頼づくりが重要だと感じました。また、小野地区では 9 月 1 日に、大鶴地区では 9 月 6 日に、行政が復旧や復興の進め方について住民の意見を聞く意見交換会が開催されました。住民約 70 名が参加し、孤立集落での今後の避難や、水害の影響を受けない安全な土地の確保、農地復旧、今度の土砂崩れの危険性や対策など多岐にわたる不安の声が聞かれました。

足湯ボランティア（震災がつなぐ全国ネットワークとの連携）

自治会長から「地域の中に話しをしたい人が多いので、聞いてやって欲しい」という声があり、8 月から震災がつなぐ全国ネットワークの加盟団体であり、静岡県ボランティア協会が事務局を担う「しずおか茶の国会議」、「災害ボランティアコーディネーターなごや（ボラコなごや）」と RSY とで、大鶴地区内の公民館などでお茶会・足湯ボランティアを行い、延べ 100 人ほどの足を温めました。

また、足湯に合わせて、大分県弁護士会や日田鍼灸師会も参画し、法律相談やマッサージ等も行われました。

子ども支援

小学校の校庭やスポーツグラウンド等が災害の影響で使えなくなったことや、監視員の確保ができず夏休みのプールが開放されないなどの理由から、子どもたちの遊び場が激減しました。そこで、楽しい夏休みの思い出づくりに、被災地 NGO 協働センター主催・RSY 協力のもと、大鶴地区の子どもたちを対象に、8 月 20 日「天ヶ瀬 B&G プールへ GO」、8 月 26 日「前津江町山川遊び」を企画。全体で約 50 名の子どもたちが参加。山川遊びプログラムは当日あいにくの雨模様のため、鯛生金山（たいおきんざん）での砂金掘りや巨大シャボン玉、紙飛行機づくりに急遽変更。子どもたちは終始大はしゃぎでした。

●ひちくボランティアセンター運営支援

8 月 11 日と 28 日、おおいた NPO デザインセンターと JVOAD の呼びかけにより「日田市豪雨被害復旧・生活支援のための NPO 情報共有集会」が開催されました。この集会は、行政・社協・地域住民・県内外 NPO との対話促進を目的としており、第 1 回情報共有集会では、約 20 団体（参加者 50 名）が参加。関係機関の顔合わせに加え、日田市社協から日田市災害 VC の閉所に向けた説明がある中、現状の課題共有と今後の方向性について話し合う場となりました。第 2 回情報共有集会では、日田市災害 VC 閉所後の支援の方向性について話し合い、住民と行政、社協をつなぐ中間組織の新たなネットワークとして、「ひちくボランティアセンター（ひちく VC）」を開設することが決定しました。「ひちく」という名称は、「肥筑（ひちく）方言」などに用いられる地域の総称とのこと。肥筑エリアは中・北部九州地域を包括しており、今回豪雨にて被災した福岡県西部や大分県日田市も含むことから名づけられました。

大分合同新聞
福岡・大分
豪雨
日田市ボランティアセンター今月末に閉鎖
支援活動継続へ団結
県内外20団体 課題など情報共有

ひちく VC では、日田市災害 VC 閉所後に残る活動ニーズ（田畑の復旧、家の片付けなど）に対して継続的に活動するとともに、集いの場づくり、支援や各種相談窓口、加えて先々には「災害に強いまちづくり」を見据えた活動を目指しています。

ひちく VC の運営は日田市内の NPO 法人やボランティア団体、日田市から委嘱されている集落支援員や地域おこし協力隊、地域住民などが担い、RSY やその他の外部支援団体がサポート役として関わりました。

作業系ボランティア活動のセンター運営サポート

ひちくボランティアセンター(VC) は、8 月末に日田市災害ボランティアセンターが閉所した後のニーズを引き継ぐ形で、9 月 1 日から毎週金～日・祝日にボランティアの受け入れを開始し、RSY はひちく VC の運営全般のサポートを実施しました。9 月からの 2 ヵ月間で、ボランティア約 1,000 名を受け入れ、被災者から約 90 件の要望に対して約 60 件に対応。その後も日々新規ニーズがあがるなど、地域からも求められるセンターとなっています。

ひちく VC には、自宅建物外や側溝、農地や水路などの泥出しのニーズも寄せられ、10 月からは農地の泥出しやビニールハウスの解体作業の依頼が増えてきました。ニーズ対応は、一般ボランティアの他、ひちく VC に参画する、地元のチーム大分・鶴の恩返し、外部支援者の愛知人・ロハス南阿蘇たすけあい等が関わり、活動しています。活動状況等はフェイスブックで随時発信し、日田市の現状を伝えています。

また、運営には、地元 NPO や日田市地域おこし協力隊・集落支援員、住民などが関わっており、RSY では運営のサポートを担いました。

住民の集う場づくり

日田市大鶴地区では、被災の影響により年度内のイベントの全てを自粛しましたが、住民を元気づけようと、10 月 28 日、ひちくボランティアセンターと大鶴振興協議会が共催となり、「みんなで大鶴交流会」を開催。RSY も企画準備から当日運営までをサポートしました。

当日は台風の接近に伴い雨天となったため、大鶴公民館内での開催となりましたが、住民約 300 名が参加し、久しぶりの再会を楽しみました。借上型仮設（みなし仮設）住宅にお住まいの参加者は「気心しれた人達に会えて嬉しい」と話していた一方、「水が口に合わない、やっぱり大鶴に戻りたい」、「支援の情報がほとんど届かない」など、心の内を吐露する場面もありました。

また、この交流会開催にあたっては、地元内外の企業やボランティア団体も企画に協力いただき、楽しいひと時をともに過ごすことができました。

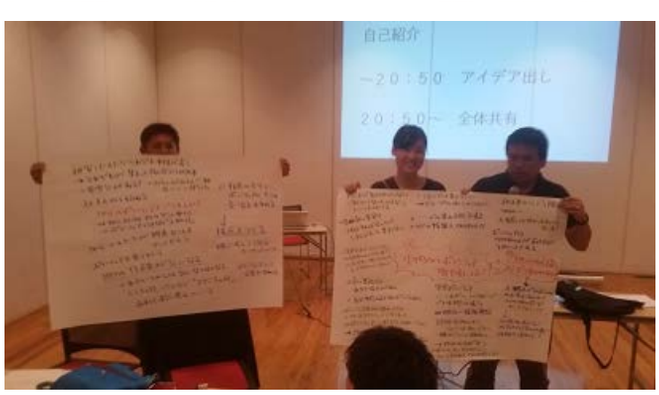
ネットワーク会議の開催サポート

ひちく VC 設立のきっかけとなった情報共有集会の目的を継承し、ひちく VC が主催となり、おおいた NPO デザインセンターの共催により「ネットワーク会議」を開催することになりました。RSY では先に開催された情報共有集会の参加者に、今後の同会議の参加を働きかけるなど、開催準備のサポートのほか、当日のグループワークの進行など、運営にも関わりました。

このネットワーク会議は、日田市の現状報告と支援団体の繋がりづくりを目的とし、水害から３ヵ月が経つ 10 月 5 日に開催。ひちく VC 事務局からボランティアセンター等の取り組みの情報と課題の共有を行った後、「日田へのボランティアを増やすために」をテーマに、参加者とともに意見交換を行いました。

参加者からは「地元の繋がりを活かし大学や企業に呼びかけをする」「福岡発のボランティアパック、観光面とセットにしてはどうか」などの意見が出され、日田市民からは「ボランティアばかりに頼ってはいけない。地元からボランティアを出すために、地元がどうしたいかを聞き出す会議を行ったほうがいい」などの意見もあり、地元主体の活動への意識が高い団体が多いと感じました。

日中は作業系の現場で走り回っている団体も多く、このネットワーク会議が関係者の想いを共有する場となりました。ネットワーク会議はひちく VC が主体となり今後も継続して開催される予定です。



外部支援との連携・調整

トイレカーの活用

中部土木株式会社様より、トイレカー10 台を貸与いただき、福岡県朝倉市に 8 台、大分県日田市に 2 台に配置し、最長 11 月末まで活用されました。特に朝倉市では断水が長期にわたる地区での活動の際に重宝され、住民やボランティアの不安を解消することができました。

トイレカーの車庫がある福岡県鞍手町から現地までの輸送は、エフコープ生活協同組合様にご協力いただきました。

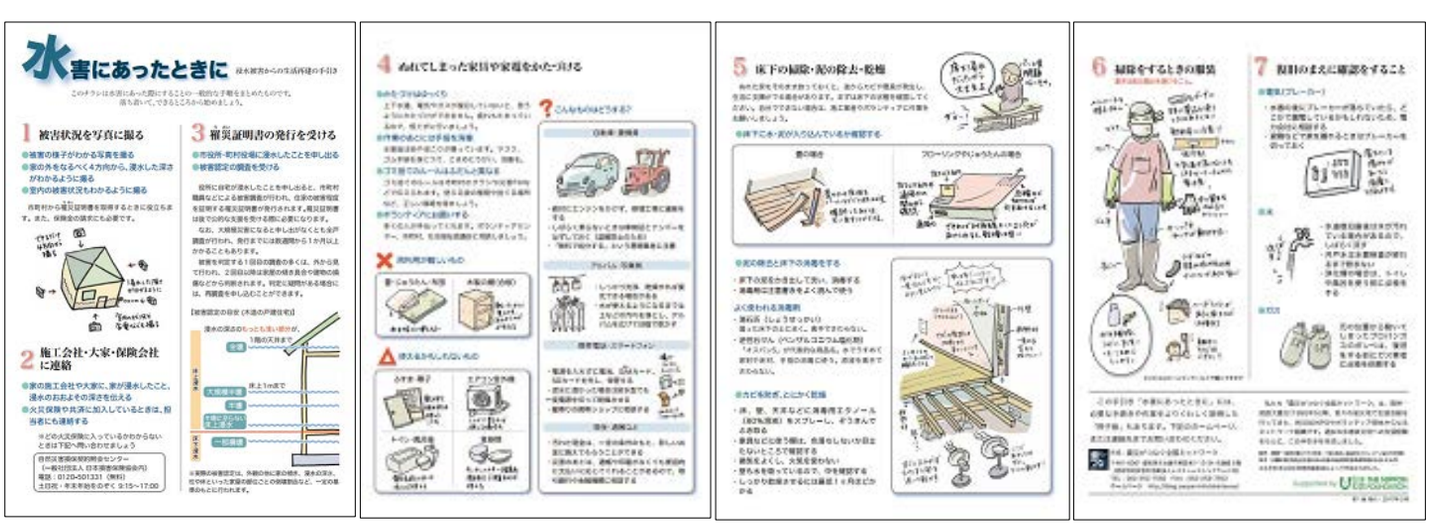
全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）

支援の抜け、モレや重複を防ぎ、地域にニーズにあった支援活動を促進するため、ニーズや支援に関する情報を集約し、支援活動の調整機能としての役割を果たしています。朝倉市役所朝倉支所の一画に事務所を構え、災害発生当初は毎日、その後は週 3 回、19 時より支援団体の情報共有会議を開催（8 月末までに 38 回開催）。誰でも参加可能なオープンな会議で、地元の団体、外部支援者（NPO、NGO）らが参加しています。現在までに約 150 団体近くが参加しました。

震災がつなぐ全国ネットワーク（震つな）

震つなでは、日田駅の近くに事務所兼宿泊施設（日田ベース）を構え、震つな加盟団体および、関連団体・個人のボランティア受け入れを行なっています。「一人ひとりの生の声を大切にする」をモットーに、足湯やお茶飲み場など、癒しや心の内を安心して話せる場づくりを中心に活動しました。

また、水害から復興までに必要な対応や手続き、受けられる支援について分かりやすくまとめた冊子「水害にあったときに」を作成。新聞・ラジオ等のマスコミ各方面にも多数取り上げられると共に、朝倉市や日田市の被災者宅を訪問、手渡しするなど、これまで 6,000 部を超える冊子を配布しています。被災者からは、「非常に分かりやすい」「冊子を読むことで先の見通しを持って生活できる」など大変好評をいただきました。



認定特定非営利活動法人 **レスキューストックヤード**

平成 29 年九州北部豪雨水害　被災者支援
活動報告書

2017 年 11 月 30 日発行

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード(RSY)

（名古屋事務所）

〒461-0001

名古屋市東区泉 1-13-34 名建協 2 階

tel　052-253-7550　　fax　052-253-7552

e-mail　info@rsy-nagoya.com

web　http://rsy-nagoya.com/

twitter　rescuestockyard

facebook　rsy.nagoya

特集 九州北部豪雨災害救援活動

7月に発生した九州北部豪雨災害。当センターでは、大分県日田市にて支援活動を展開してまいりました。詳しい活動内容などは、HP（http://blog.livedoor.jp/kyodocenter-kyusyugou/）をご覧ください。

被災地NGO協働センターでは、九州北部豪雨災害の被災地・日田市にて支援活動を継続しています。

■九州北部豪雨災害の支援

2017年7月5日に九州北部地方の福岡県・朝倉市、東峰村、大分県・日田市などを襲った豪雨は甚大な被害を各地にもたらしました。被災地NGO協働センターは、災害発生直後から被災地に入って支援活動を行ってきました。日田市には熊本地震で活動を共にした河井昌猛さん（西原村百笑応援団）が住んでおられたため、早速連絡を取り一緒に活動をすることとなりました。

現在は、水害から約5ヶ月が経過しましたが、いまだに家に戻れずに暮らしている方もたくさんいらっしゃいます。日田市では仮設住宅の建築が行われず、全ての方が刈り上げ型仮設住宅、いわゆる「みなし仮設住宅」に入居されています。みなし仮設に入っている方々にはなかなか情報が届かず支援が行き届いていないのが現状です。支援に携わる方々と協議をしながらみなし仮設住宅の訪問活動がようやく始まっています。アンケート調査をしたわけではありませんので、はっきりと数字で出ているわけではありませんが、みなし仮設住宅の方は、地域に戻ってきたいと考えている方が多いという印象です。ただ、土砂崩れが起きた地域に再び戻って大丈夫なのか？堤防が直らないと同じところには家が建てれない、5年前も水害にあったのでもうあいたいくない、など様々な不安要素があり、すぐさま地域に戻ってくることはできないというのが現状です。

一方で、地域に残っている方々も、再び大雨がふれば土砂崩れに見舞われる不安を抱えながら生活をされています。また、地域から出ざるを得ない人たちもいることから、自治会などの維持が本当にできるのかどうか不安を感じておられます。

■子どもたちへの支援

日田市の中で豪雨被害の甚大であった大鶴地区や夜明地区の子どもたちが通う大明小学校では、夏休みのプール解放がうまくできず、子どもたちの遊び場がなくなってしまうという問題が起こっていました。多くの家が被災をしたために、監視員を務める保護者の方が集められず解放ができなくなっていたのです。そこで、当センターでは子どもたちの支援企画を計画し、2回ほど実施することとなりました。第1回は天ヶ瀬B &Gのプールへ行く企画、2回目は日田市中津江村の鯛生金山へ遊びに行く企画です。

当日は多くの子どもたちが参加して遊びを楽しんでくれました。

今回の企画では、大分県曹洞宗青年会やコープおおいたの方々のご協力をいただき、無事に成功させることができました。ありがとうございました。

■ひちくボランティアセンターの活動

日田市では社会福祉協議会による災害ボランティアセンターが8月いっぱいで閉鎖をすることとなりました。しかしながら、現場ではたくさんのニーズが残っている状況もありました。特に畑や田んぼなどの作業については、社会福祉協議会の活動範囲外となっていたこともあり、多くの住民の方からのご要望が出ているものの、ボランティアによる作業がなかなか入れないという状況もありました。

そこで、日田市内のNPO団体やボランティアグループなどと協議し、9月1日から「ひちくボランティアセンター」を設立することになりました。当センターもひちくボランティアセンターの事務局サポートとして活動を支えています。

「ひちく」というのは、肥前や肥後、筑前、筑後を含み、漢字で書くと肥筑となります。日田市だけに限らず、今回の豪雨災害で被害を受けた地域全体の取り組みを中長期的に考えていこうという意味が込められています。

ひちくボランティアセンターでは、田んぼや畑の作業だけでなく、みなし仮設住宅の訪問や住民の方々の憩いの場作り、行政との意見交換などを行なっています。最近では、地域の方々同士の交流を促進するために、大鶴地区、小野地区の2か所で交流会を開催しました。当日は、予想以上の方々にお集まりいただき、交流をしていただくことができました。みなし仮設住宅の方は、久しぶりにたくさんの地域の方と出会って嬉しかったとおっしゃっていました。先日訪問した住民の方の中には「5ヶ月たってもう忘れられて来ている。自分たちで片付けや再建をしていくしかない、と思うけど、何にもやる気が出ない日が多くて・・・。ボランティアをまだやっていると聞いて少し光が見えた気がします。」という話をされていた方がいました。まだまだ復興への道のりは長く険しい状況です。

ひちくボランティアセンターは、地元の方々のご協力を得ながら活動をしていますが、ボランティアの方々による運営なので、まだまだよちよち歩きの新しい団体です。多くの方からのご協力を得ながら、豪雨災害からの復興をサポートしていく団体として活動を継続していきますので、皆様の今後のご協力もどうぞよろしくお願いします。

(頼政良太)

こんな生き方あったんだ！？
～農業・漁業・林業・NPO/NGO・僧侶…多様な働き方・生き方を通して見るもう一つの社会～

第8回　もう一つの社会を生み出す働き方・生き方とは？

日時：1月31日（水）
講師：山口一史さん

（ひょうご・まち・くらし研究所常務理事）

場所：被災地NGO協働センター
（神戸市兵庫区中道通2-1-10）
参加費：2500円（食事代込）／1500円（学生）

被災地の復興に欠かせないのが、被災前の価値観からの転換を図ること、つまり、「もう一つの社会」を実現することです。価値観の転換には、第一次産業のように地元に根ざした仕事をしている方や、NPO/NGOのような非営利のセクターで働く方など、「もう一つの働き方・生き方」を選択する人が増えていかなければ難しいと考えられるでしょう。今回の寺子屋シリーズでは、実際に「もう一つの働き方・生き方」を選択し、実践を続けておられる方々をお招きし、①なぜその活動（仕事）を選んだのか？②なぜその活動（仕事）を続けているのか？③その活動（仕事）を通して生き方（や人生）がどう変わったのか？という3つの視点からお話をお聞きし、「もう一つの社会」に欠かせない要素について探ってきました。

最終回となる今回は、ひょうご・まち・くらし研究所常務理事の山口一史さんにこれまでの講師の方々のお話を踏まえて、「もう一つの社会を生み出す働き方・生き方」について、まとめのお話をしていただきます。

ぜひお越しください！

■講師プロフィール

神戸大学卒業後、神戸新聞社入社。経済部長、論説委員、情報科学研究所長などを経て、1998年ラジオ関西常務、同社長。2003年に退任し、ひょうご・まち・くらし研究所の設立に参加し常務理事に。神戸生まれ。2013年6月からコープこうべ理事長。

■申し込み／問い合わせ

被災地NGO協働センター
TEL:078-574-0701
FAX:078-574-0702
E-mail:info@ngo-kyodo.org

九州北部豪雨災害 ADRA Japan 活動報告

ADRA Japan は 2017 年７月６日から約５か月間現地にスタッフを派遣し、九州北部豪雨により被災された方々への支援を行いました。現地の住民の皆様が、少しでも安心できる生活を取り戻せるよう、今後も必要とされる支援を継続して参ります。

【九州北部豪雨災害 被災者支援活動 概要】

（発災直後の東峰村）

2017 年７月５日から６日にかけて九州北部で、線状降水帯により同じ場所に猛烈な雨が降り続いたことで、多いところで降雨量が 500 ミリを超え、24 時間降水量が観測記録を更新するなどしました。この災害により、福岡県と大分県で死者 37 名、行方不明者 4 名の人的被害の他、多くの家屋の全半壊や床上浸水など、甚大な被害が発生しました。

こうした中で ADRA Japan は、次の５つの活動を行いました。

1. 初動対応（朝倉市）
2. 災害ボランティアセンター運営支援（東峰村）
3. 看護師派遣（日田市）
4. 登録制社協ボランティアセンター立ち上げ支援（東峰村）
5. 在宅被災者物資配（東峰村）

1. 初動対応（避難所物資配布）：７月６日～７月 12 日

発災翌日に、２名の ADRA Japan スタッフが現地入りし、まず被害状況を把握するため、朝倉市内の避難所を巡回して調査を始めました。一つの避難所だけを確認しても全体的な状況は把握できないため、朝倉市内に開設された全ての避難所を訪問して聞き

取り調査を行いました。同時に、避難所で必要とされている物資の支援を開始しました。

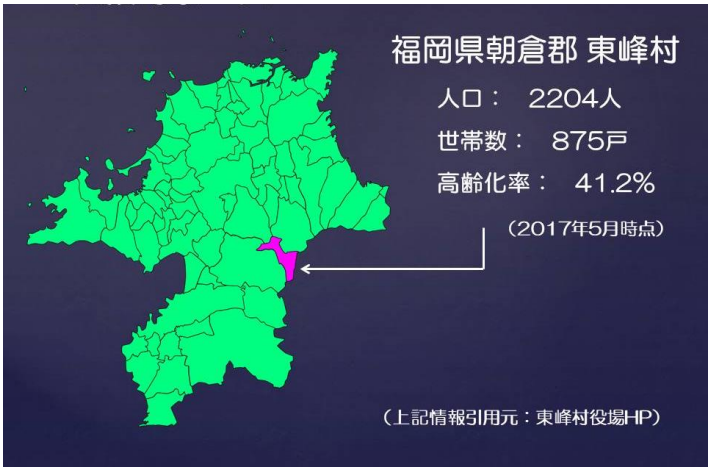
他方、東峰村からも情報が入り、７月 10 日からは東峰村災害ボランティアセンター開設前の支援を同時進行で行いました。日中は東峰村、夕方からは東峰村に隣接する朝倉市へ、災害による道路封鎖のために山道を迂回して通いながら支援を続けました。

（住民の要望を受けて朝倉市内の避難所に日除けカーテンを設置）

2. 災害ボランティアセンター運営支援：７月 11 日～9 月 1 日

発災当初、東峰村では道路が陥没し、橋が流され、流木や土石流で道が塞がるなどして孤立状態となりましたが、自衛隊などによる懸命な復旧作業により７月 10 日夜には孤立状態が解消しました。

（東峰村社協事務所での災害ボランティアセンター開設前準備）



そうした中、東峰村では住民の方々の家屋の土砂撤去を行う災害ボランティアセンターの開設が決まりました。東峰村社会福祉協議会（以下東峰村社協）からの要請を受けたことと、一方の朝倉市には多くの支援団体が駆けつけていたことから、東峰村災害ボランティアセンター開設の 7 月 14 日を境に、ADRA Japan は東峰村での支援に全力を尽くすことを決めました。

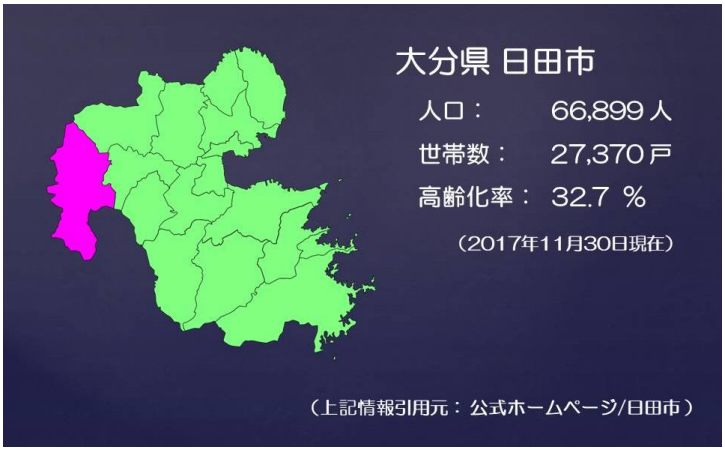
その後、東峰村災害ボランティアセンターから、支援期間延長の要請を複数回受け、結果的に災害ボランティアセンター開設準備から閉所までの期間、そして同センター終了後の新体制立ち上げサポートに至るまでの約 5 か月間、ADRA Japan スタッフを常駐させ、支援を継続しました。こうして一貫した支援を行ったことで、東峰村社協をはじめとした地元関係者の皆様との信頼関係も深まり、現地の方々を主体として今後の方針をともに考え、行動に移していくことができました。

（災害ボランティアセンターの定例会議）

（住民の方から依頼の相談を受けた現場の確認）

3. 看護師派遣：7月27日～8月28日（週末のみ）

ADRA Japan の海外事業等にボランティアとして参加されたことのある看護師の方々に呼びかけ、災害ボランティアセンターへの専門職派遣を行いました。全国災害ボランティア支援団体ネットワークの調整の元、日田市災害ボランティアセンターの救護班としての業務を担っていただきました。



看護師派遣は、主にボランティアの活動人数が多い週末に絞り、期間中の活動としては、災害ボランティアセンター内の救護室設置や、ボランティアの方々の怪我の処置、熱中症の対応などがありました。また、ボランティア活動現場を訪問し、冷タオルや冷水を提供する一方、住民の方々の健康状態の観察をし、医療の提供が必要と思われる方々についての情報共有を行いました。

＜看護師派遣の活動記録＞

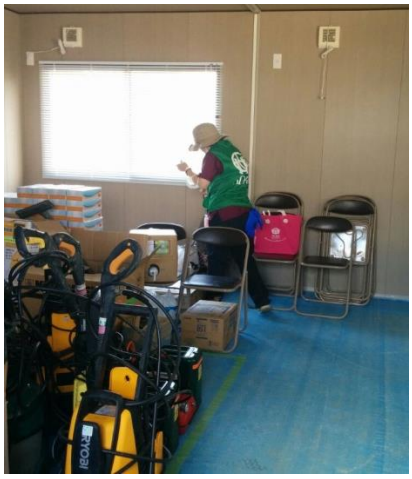
・活動日：13 日間（7 月～8 月の週末）

・災害ボランティアセンター救護室での対応：10 人（うち熱中症 4 人）

・戸別訪問（健康調査）：延べ 15 人

日田市に派遣した ADRA Japan スタッフが看護師資格を有していたこともあり、少ない人数で効率的に住民の方々の健康管理サポートをすることができました。

（日田市災害ボランティアセンター）



（ボランティアセンター内の資材倉庫に救護室を設置）

4. 登録制社協ボランティアセンター立ち上げ支援：9 月 4 日～12 月 4 日

東峰村では、災害ボランティアセンターが 9 月 1 日に閉所になった後も、まだまだ残されているニーズに地元の職員だけで対応する必要がありました。今後の活動方針についてアドバイスを求められ、これまでの事例を元に、少人数の地元職員だけで運営で

きる登録制ボランティアセンターの仕組みをつくって対応を継続することを提案しました。そして、災害ボランティアセンター閉所のための作業と並行して、登録制ボランティアセンター開設の準備と体制づくりを、地元を主体として進めていきました。

登録制社協ボランティアセンターの活動初日には、25 名募集のところ、延べ 30 名のボランティアの方が集まってくださり、順調に活動を始めることができました。

11 月以降は、登録制社協ボランティアセンターと村の有志の方々による農業ボランティアが協力することで、住民の皆さんの声により柔軟に対応できるようになり、活動の幅がさらに広がりました。

（ボランティア活動日の朝の打ち合わせ）

（ボランティア活動現場）

5. 在宅被災者物資配付（東峰村 全壊・大規模半壊・半壊世帯）：10 月～12 月

10 月には全国災害ボランティア支援団体ネットワークの調整の元、東峰村からの要請を受け、在宅被災者（仮設住宅などに入居せず自宅で生活を送っておられる方々）向けの物資配付を ADRA Japan で行いました。「全壊・大規模半壊・半壊」の住家被害認定を受けた在宅被災者の全世帯を、物資配付の対象としました。

発災から３か月が経過し、被災された方の居住の状況は様々で、親族宅や知人宅に身を寄せておられる方のほか、何らかの事情により長期不在の方もおられました。また、生活再建のスピードも一様ではなく、そのため物資配付支援を行うにあたっては、各世帯の状況を考慮しながらも全体に適用可能な支援メニューを検討する必要がありました。

世帯毎にニーズが個別化している状況の中、限られた物品メニューの中から物資を選んでいただくよりも、各世帯のニーズに柔軟に対応するため、商品券（全国の多数の店舗で使用できるもの）を配付し、生活再建の一助として活用しいただくことが最適と考えられました。

また、様々な状況に置かれている対象者全員に漏れなく商品券を配付できるよう、東峰村役場をはじめとした関係者と共に、支援に必要な情報を十分精査しました。その上で、対象世帯へは地元の事情に詳しい職員の方と一緒に戸別訪問し、商品券をお渡ししました。その際、支援の趣旨についての説明を行い、商品券が使える店舗に関する情報を提供することで、ご自分に必要なものをできるだけ具体的にイメージしていただくなど、生活再建の一助としていただけるよう工夫しました。

（地元の職員の方と一緒に戸別訪問）

（必要な情報をお伝えしながら商品券を配付）

ADRA Japan は今後も、現地の必要に応じた支援を継続して参ります。今後とも、皆様のあたたかいご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

最後に、この度の災害により被災された皆様の生活再建が一日も早く進みますよう、心よりお祈りいたします。

平成 29 年度九州北部豪雨災害の支援活動報告

（特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会）

１．被災地支援ボランティア活動のための募金とタオルの呼びかけ

ボランティア活動募金は 176 件の個人・団体などから 3,745,848 円、タオルは 186 件の個人・団体などから 14,766 枚の協力をいただいた。

２．被災地での活動

「しずおか茶の国会議※」に緊急会議を呼びかけ被災地支援について協議、合同で支援活動を行うことになった。※熊本地震の際にチーム静岡として支援を始めたことをきっかけにできた、ゆるやかに情報共有と連携を図る場。参加メンバー・団体は、静岡県 V 協、静岡県社協、市町社協、FAJ、はままつ子育て NW ぴっぴ、市町災害 VCo など

◇先遣隊の活動

・7 月 11 日（火）～18 日（月）

7 名（のべ 22 名）が数人ずつ交代で現地に入り、添田町災害ボランティアセンターの運営支援及び日田市・東峰村・朝倉市などで情報収集

・7 月 27 日（木）～28 日（金）

静岡からのボランティア送り出しに向けた事前調整

◇ボランティアの送り出し

活動調整、受入れ、日田ベースの利用など、震災がつなぐ全国ネットワークの全面協力を得て静岡からボランティアを送り出した。活動者 34 名。

活動場所：大分県日田市大鶴地区

活動日／活動者数：第 1 次隊…8 月 3 日（木）～5 日（土）　7 名
第 2 次隊…8 月 24 日（木）～26 日（土）　8 名
第 3 次隊…9 月 8 日（金）～10 日（日）　6 名
第 4 次隊…9 月 22 日（金）～24 日（日）　5 名
第 5 次隊…10 月 6 日（金）～8 日（日））　8 名

活動内容：足湯、炊出し、お茶サロン、ひちくボランティアセンターの運営手伝いなど

＊足湯、サロン活動

隊次	場　所	来場者数	備　考
1	上宮町下中山際公民館	36	藤井自治会長ご夫妻の協力 大分県弁護士会 4 名参加
2	上宮町下中山際公民館	16	ADRA の看護師さん 1 名参加 大雨のため鶴城での活動は中止
3	日田市鶴城町公民館 野菜工房･沙羅	12	好天で農作業に出た人が多かったもよう
4	野菜工房･沙羅	1 （足湯利用者）	沙羅の復活オープンに合わせ実施 RSY の看護師さん 2 名参加 しぞ～かおでん 100 食提供
5	野菜工房･沙羅	12 （足湯利用者）	桜えび入り豚汁 83 食提供

３．専門ボランティアの派遣

JVOAD より相談があった看護師派遣について(福)聖隷福祉事業団の協力を得て実施することができた。2 名一組でローテーションを組んだ 16 名の看護師さんが、朝倉市災害ボランティアセンターで 8 月 1 日から 9 月 2 日までの 1 ヶ月間、熱中症対策などボランティアの健康管理を中心に活動を継続した。

４．報告会の開催

活動に協力いただいた方々への報告とともに今回の豪雨災害について知り、災害への日頃の備えの大切さなどを考える機会として、しずおか茶の国会議と共催で報告会を行った。

日　時：12 月 23 日（土・祝）13：00～16：30

会　場：静岡県総合社会福祉会館 2 階ボランティアビューロー

参加者：44 名

内　容：◇災害現場からの報告

「豪雨災害、上宮町自治会はどう動いたか」

お話…藤井隆幸さん（大分県日田市上宮町自治会長）

◇災害ボランティアの活動報告

日田市での第 1 次隊から第 5 次隊までの活動

報告：しずおか茶の国会議、災害ボランティア参加者

◇専門ボランティアの活動報告

看護の専門職ボランティアによる災害ボランティアセンター支援活動

報告：齊藤　隆さん（(福)聖隷福祉事業団 聖隷三方原病院看護師）

林　美恵子さん（(福)聖隷福祉事業団 聖隷浜松病院看護師）

◇もっと聞きたい！～ゲストを交えた交流会～

以　上

2018 年 3 月 26 日（月）

平成 29 年 7 月九州北部豪雨災害報告

団体名:風組関東
代表者:小林直樹

■　活動の概略

2017 年 7 月 5 日、活発な梅雨前線などの影響による九州北部豪雨は福岡県から大分県に至る広い地域に大きな被害をもたらしました。

風組関東では、発災直後より連携団体と共に資機材重機及び車両手配等を進め、7 月 8 日より小林ほか 2 名が朝倉市に入りました。

■資機材中継点確保と現地調査

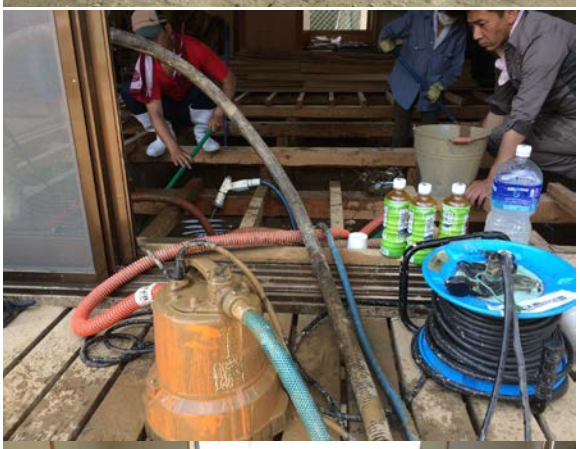
活動のための資機材を中継する拠点は朝倉青年会議所と連携し、JA の倉庫をお借りしました。現地の情報は山間地に詳しい地元の製材所と連携し、マッピング作業と現場調査をおこないました。

■被災地域の調査と水害復旧マニュアルの配布

水害で被災した家屋は早期に対処するほど被害が拡大せず、再建までの時間も短縮できます。まず地域の家屋の応急処置に対する必要性や知識を持って頂くことから始める事とし、朝倉市杷木及び比良松地区の区長と連携し活動を開始しました。風組も参加し 4 月に完成した「水害にあったときに」（震災がつなぐ全国ネットワーク発行）を各戸に配布しながら、復旧に向けた家屋の応急処置や公的支援制度の説明などを説明して回りました。

■地域住民と集会所の復旧ワーク

地域の集会所の応急処置について区長さんをはじめ役員の皆さんと協議し、地域の住民を集めて復旧作業をおこなうことになりました。比良松地区の新道自治会館は当時公的支援がほぼなかったため、地域で復旧させる必要がありました。風組では作業コーディネートほか、特殊資機材貸出しなど全面的に協力し、復旧の一般的な流れに沿って進めました。これにより地域の拠り所である集会所が優先的に復旧し、復興への弾みがつくと同時に「知らないことだらけで助かった」「工務店の言っていることがようやく理解できた」「自宅もぜひ見てほしい」など、参加した被災住民からも多くの質問やニーズを頂き、この後順次対応していくことになりました。風組の認知度も上がり「困った時は風組へ」とその後多くの指名を頂くことになりました。



■地域の家屋保全

活動期間中、随時頂いたニーズを元に地域や各戸を訪問し、水分量の測定、修繕に関するアドバイスをおこない、必要であれば作業もおこないました。初めてお伺いする地区は当初少ないニーズでありますが、1軒のお宅を作業すると、その噂が広まり連鎖的に多くのニーズを頂きました。

下比良松地区においても区長さんと連携し、高齢者やおひとり暮らし世帯などを優先的に作業させて頂きました。

■資機材の貸出

復旧の過程で、工具があれば自分で作業ができる方には優先的に工具の貸出をし、そのサポートをするように心がけました。そのほか水害では 1mmまで水を吸い上げるポンプや強制的に乾燥させる特殊な送風機などを地域に貸出し、生活再建までの時間短縮に寄与することができました。

その他、支援団体にも資機材貸出をおこないました。

貸出資機材

・丸ノコ、汚水バキューム、ダクトファン（送風機）など

・貸出件数　8地域32世帯　支援団体4団体

■この活動においての成果

過去の水害支援の経験から、その時何が求められているのかを的確に判断し、支援に繋げる事ができました。技術系ボランティアとして家屋の応急処置のアドバイスを通じ、わずかでも損をさせないこと、考える時間を少しでも多く残すこと、選択肢を一つでも多く残す事ができ、地域の１日も早い復旧に貢献することができました。

■活動期間

7 月 8 日～1 月 31 日

■協力・連携団体、個人

朝倉市社会福祉協議会、朝倉青年会議所、朝倉地域コミュニティ協議会、朝倉新道自治会、朝倉下比良松自治会、DRT-Japan、震つな、支援プロジェクト会議（支援 P）てごうし隊、曹洞宗青年会、杷木支援ベース、東浜工業（株）

九州北部豪雨（日田市）活動報告書（2017年7月9日～12月18日）

災害ボランティア　愛・知・人

1. 活動内容

【活動の目標】

事業内容:
①日田市社協のボランティアセンター立上げの補助
②ニーズ調査及び現場調査
③住民及びボランティアさんの健康管理
④家屋復旧作業
⑤土砂災害のあった家屋の裏山や崖の補修及び水路の確保

【活動回数】
代表赤池：7/7～7/29・8/11～21滞在
中村（ナイチンゲール隊）：7/7～7/17滞在
作業チーム：①7/7～7/13②7/14～18③7/21～7/24④7/28～31⑤8/4～7⑥8/10～14⑦8/17～21
⑧8/25～28⑨9/1～4⑩9/8～11⑪9/15～19⑫9/22～25⑬9/29～10/2⑭10/6～10
⑮10/13～16⑯10/20～23⑰10/27～30⑱11/2～6⑲11/17～20⑳12/15～18
その他活動：募金活動（9/8小牧「ふれあいフェア」・9/18今池まつり・10/7パルティ瀬戸）
街頭募金活動（7/8・7/20・23　9/3）
10/7春日井社協「災害ボランティア研修会・

2. 活動によって得られた成果：

①日田市社協のボランティアセンターの立ち上げ補助
ボラセン立ち上げ経験のない市において、社協職員のみでの立ち上げ・運営は不可能に近い為、経験のある災害ボランティア団体による連携によりスムーズな運営ができた。

②ニーズ調査及び現場調査
自治会長や民生委員の協力を得て各戸を巡回。住民主体の復興であることの認識を持っていただけた。床下の泥の現場確認を実施し、必要人員や必要機材の指示を行った

③住民及びボランティアさんの健康管理
看護師の免許を持つナイチンゲール隊が主体となり冷えたおしぼりを持って各戸を巡回。
冷えたおしぼりを持ってボランティアの作業場を巡回し、休憩を促し熱中症ゼロとした。

④家屋復旧作業
水害被災地での経験豊富なメンバーが一般参加のボランティアに養生の必要性や作業手順のレクチャーを行い、チームリーダーとなり作業指導を行った。

⑤土砂災害のあった家屋の裏山や崖の補修及び水路の確保
重機やチェンソーを扱えるメンバーを招集し、専門的な分野の作業もこなした。

無残な姿になった我が家に頼る人もなく呆然とする日々を送っていた住民の方が、丁寧に養生を施し作業を進めるボランティアによって日々綺麗に片付いていく家をみて「生きる希望が持てた」と心から喜んで頂き、お礼の言葉を数知れず頂いたことはボランティア冥利に尽きる活動でした。
また地元大分在住のボランティアの方がたくさん愛知人メンバーに加わり情報交換をすることで、日々変化する現状把握ができ、週末にしか行けない私達のフォローをしていただきました。今後は地元のボランティアさんに引継ぎをして行きます。

3. 成功したこととその要因

①丁寧で効率の良い家屋復旧作業

大切な家で作業をさせてもらうという意識を持ち、養生の大切さを広めるためチラシを作成。
一般参加のボランティアさんにレクチャーを行い作業指導をすることで住民の皆さんにも安心感を与え、ボランティアの育成にも貢献できた。またチラシは津久見ボラセンからも活用したいと申し出があり送付。
助成金や支援金のおかげでゼロポンプなど高額な備品を買い揃えることができたため、効率よく作業が出来た。

②住民の方の不安感に対する傾聴及びボランティアの熱中症ゼロを完遂

看護士の免許を有するメンバー（ナイチンゲール隊）により、住民の方の健康状況や心のケアのため各戸を巡回し傾聴。また酷暑の中作業するボランティアの健康管理にも気を配り、冷たいおしぼりの配布やかき氷を振舞い熱中症対策を行った結果、熱中症患者を出すことなく猛暑の作業が終了。

③地元ボランティアさんや自治会さんとの連携ができたこと

ボラセン立上げから関わったことで、地元の自治会長さんと懇意になることができ公民館を宿泊所として無料提供いただけたことは、毎週末通う私たちにとって大きな援助となった。
またいつまでも遠方の私たちが現地に通うわけにはいかないが地元のボランティアさんがメンバーに加わったことで今後も活動は継続し、必要があれば愛知からも現地に向かう。

4. 今後の課題について

ボランティアがどこまで支援をするのかは永遠の課題です。社協が運営するボラセンは1か月半で閉鎖されその時点で道路がようやく復旧した地区が全く取り残されていた現実を考えると、社協のボラセン撤退と共に私達も撤退するとは言えませんでした。そして地元の団体と共に「ひちくボランティアセンター」を立上げ作業班として私たちがメインで活動することになりましたが、会社員で構成される私達は平日仕事をしながら毎週末5～15名が自家用車の乗合いで現地に向かい作業するという日々。週末の天候にも左右され思うように作業が捗らず家屋復旧及び土砂災害の補修に3か月かかってしまいました。遠方のため膨大な交通費がかかりメンバーの身体の負担も大きかったと思います。それでも「住民さんのために」とひた走る、メンバーたちは素晴らしいボランティア精神の持ち主であることを支援者の皆様にお伝えしたいと思います。
また、鈴連地区の一人暮らしのおばあちゃん宅（裏山の崖が崩れ9月より2か月間作業）その修復箇所を守るため「植樹基金」を新たに募り「花園プロジェクト」を開始。根が張る「アジサイ」や「ツツジ」を裏山に植樹し、崖崩れを少しでも食い止めようという試みです。おばあちゃんに寄り添っていたいという思いの方から続々と申し出があり、11/24から3日間の遠征で植樹し、基金に賛同いただいた方の名前をコンクリートで製作した擁壁に記した記念碑は12/18に完成。そのメンテナンスには大分在住のボランティアさんが名乗りを上げてくれました。定期的に訪問して、樹木の様子を伝えてくれています。
現地で作業を共にした方、また現地には行けなくとも、私たちの活動記録を見守り続けてくれたたくさんの方が「おばあちゃんちを守りたい」という同じ思いになってくれたこと、そのことが今回の活動は大成功だったと思っています。

平成 29 年　秋田県大雨　水害対応　報告書

報告者：横田順広（震つな事務局）

活動期間：平成 29 年７月 31 日（月）～８月４日（金）
活動場所：大仙市ボランティアセンター西部
活動人数：震災がつなぐ全国ネットワーク専従員１名（横田）
活動成果：震つな会員である、風組関東、IVUSA、レスキューアシストと連携し、大仙市内で水害被害の多かった、協和地区、峰吉川地区、下淀川地区等にてボランティアニーズ調査、水害後の応急処置について、住民への対応を行った。

7 月 22 日（土）からの秋田県大雨により、各地で被害が発生し、そのうち最も被害が甚大とされる大仙市では、市社会福祉協議会により、７月 25 日（火）から災害ボランティアセンター（本部及び西部 2 箇所、以下 VC）が開設された。

「震災がつなぐ全国ネットワーク」は、7 月 31 日（月）からの５日間、大仙市 VC 西部に専従員 1 名を送り、同ネットワークで作成した、浸水被害からの生活再建の手引「水害にあったときに」（冊子版）を手に被災者宅を訪れ、生活再建へ向けての手順の説明やボランティアニーズ調査などの活動を行った。

また、震つな会員である、風組関東、NPO 法人 IVUSA、レスキューアシストは、泥出し作業にボランティアが入るための床板はがしや浸水後の消毒作業など、技術面でのサポートを行った。

震つな専従員は上記震つな会員と連絡をとりながら、ボランティアニーズが埋もれていないか、また、あらたなニーズがあがってこないかを、各地区・各戸を巡回・訪問し、VC 及び震つな会員へ情報をつないだ。

連日のボランティア（延べ 17,743 人　8/16 現在・秋田県社会福祉協議会調べ）による活動により、8/16 に全てのボランティアニーズを完了し、VC は閉鎖された。

2018 年 3 月 26 日（月）

平成 29 年 7 月 22 日豪雨（大仙市）活動報告

団体名：風組関東
代表者：小林直樹

■活動の概略

梅雨前線により7月22日未明から 2 日間降り続いた大雨は秋田県大仙市を中心に大きな被害をもたらしました。風組関東では大仙市で活動していた岩手県社協、雫石町社協の要請を受け大仙市西仙北地区にて活動しました。

被害は河川の超水により大仙市街地をはじめ各地区で大きな被害があり、「怯えるほどの水の勢いだった」との住民の話もありました。

水流に勢いがあり、家屋の外圧による損傷もわずかにありましたが、多くは土量の少ない被害状況でした。

■被害宅の調査と選択肢の提案

社協さんと連携し、被災宅の調査を行いました。判断に困るニーズは社協さんの夕方のミーティングで共有し、ニーズ票を預かり対応しました。

社協さんでは床はがしの対応が出来なかったため、これらにおいてはは風組と連携団体で対応しました。

■災害 VC ボランティアのサポート

床はがしをしたニーズ票などは一旦災害 VC に戻し、一般のボランティアで対応しました。災害 VC のボランティアが活動する日は風組でもなるべく訪問し、活動内容などについて細かく説明させて頂きました。

風組で泥だしまで対応する場合は、災害 VC より応援を頂き、多くのボランティアで活動できました。

その他、大仙市長が建築系プロボノを手配し、多くの大工さんが災害 VC にやってきました VC では対応が出来なかったため、風組で一括してコーディネートしました。地元の大工さんの支援は被災者も安心し、そのままリフォームの相談をする方もいました。

■まとめ
泥のなかった大仙市街地は早めに災害 VC を閉めました。
大仙市本所と支所は災害対応に温度差がありました。
今回は主に支所と連携し活動しましたが、岩手県の災害でしたので今回もスムーズに活動することができました。
泥のない水害だったため、床板をあらいすぐに新品の畳を入れてしまう方などなどもおり、水害にあった家屋がどのようになるのか丁寧に説明しました。

大曲の花火大会が迫っていたため、花火までに災害 VC を閉めたいという空気がありました。これは社協さんに留まらず行政や住民も同じで、大切にされている大きなイベントなのだと感じました。

・活動期間
集計中

・連携団体、個人
大仙市社協、雫石社協、大船渡社協、岩手県社協、支援 P、レスキューアシスト、オープンジャパン、その他個人ボランティアの皆様

2018 年 3 月 26 日（月）

平成 29 年台風 18 号（津久見）活動報告

団体名：風組関東
代表者：小林直樹

■　活動の概略

2017 年 9 月 17 日に鹿児島に上陸した台風 18 号は、29 府県で 5000 棟以上の浸水被害が発生しました。風組関東では特に被害の大きかった大分県津久見市にてにて活動を開始することになりました。

■被災地域の現地調査と水害にあったときにの配布

各地域をまわり現地調査を行いました。海岸沿いにある津久見は海から離れるほど傾斜があるため水流が早く被害の大きな傾向がありました。逆に平地は水の滞留時間が長いため、水質も悪く匂いも強い傾向があります。地域の特性に合わせて社協さんにアドバイスを行い、資機材の調整を行いました。

■被災家屋の処置説明会

応急処置に対する必要性や対処方法、ボランティアで可能な範囲や対処に困るニーズへの対応について、津久見 VC のスタッフ向けに説明会を行い、多くの質問を頂きました。

その後津久見市災害対策本部より同説明会の開催依頼を頂き、市及び社協職員、地域の自治会長向けに説明会を行いました。その後説明会に参加した社協さんや自治会長より調査依頼を多くいただきました。

■災害 VC ボランティア向けのアドバイス

水害時の活動においての安全な活動に向けての注意点や活動方法などについて、災害 VC のオリエンテーション時に参加ボランティアについて説明を行いました。活動の効率化は熱中症対策などより安全な活動の推進と、住民が損をすることなく 1 日も早く自宅に戻ることができます。

■ニーズ調査と選択肢の提案

災害 VC のニーズ票で判断しかねるニーズを中心に、各戸を訪問し必要な助言や資機材及び人員の見積もりを行いました。 判断に困るニーズに対し活動内容と方法を明確にすることにより、社協 VC でも対応可能になります。

どうしたらよいかわからない被災者に対し道筋と選択肢を提案しました。再建に向け余計な負担をかけず、時間を短縮し、コミュニティの維持と環境保護にもつながります。

■活動現場でのコーディネート

災害 VC ボランティアの現地活動に同行し、活動方法や注意点などについて一緒に活動しながら説明を行いました。明確な活動ラインを決めることで参加ボランティアにもやりがいでき、効率化は被災者にも大きな効果をもたらします。

津久見は床下が深く、安全にも注意する必要がありました。

■資機材の貸し出しと家屋保全

ダクトファンなどの貸し出しを行い、設置と回収をしながら水分量の測定と消毒などの方法について助言をしました。特に床下浸水のお宅は気がつかない場合が多く、適切な処置をすることにより家屋の延命や健康被害の提言につながります。

■この活動においての成果
現地で活動する各主体に対し、水害の対処についての知識を持って頂き住民主体の支援のきっかけと、安全な活動の推進に貢献できたと思います。技術系ボランティアとして家屋の応急処置のアドバイスを通じ、選択肢を増やし、コミュニティの維持を環境保護にもつながる支援ができました。

■活動期間
9 月 28 日～11 月 24 日
■協力・連携団体、個人
津久見市社会福祉協議会、大分県社会福祉協議会、津久見市、震つな、DRTJapan、てごうし隊、ラブ&アース